

《女性研究者等研究支援成果報告 概要・要旨》

＜課題名＞

大学生の定期健康診断結果から見る摂食障害の実態調査とその対策への提言

＜代表者所属・職名・氏名＞

金沢大学保健管理センター 特任助教（SGU カウンセラー）小笠原知子

＜ネットワーク構築先所属・職名・氏名＞

福井大学保健管理センター 講師（精神科医）岡崎 玲子

金沢大学医薬保健研究域医学系 精神行動科学 助教（臨床心理士・公認心理師）水上 喜美子

＜研究成果要旨＞

摂食障害（神経性やせ症及び神経性大食症）は、10代の思春期から青年期に発症を見る精神疾患であり、特に女性において発症率が高く、健康な身体的発達のみならず、認知的、情緒的、社会的発達にも大きな影響を及ぼすといわれている。重症化すると重篤な身体症状を伴うため、近年、大学メンタルヘルスの現場でも、摂食障害の早期発見・早期介入の必要性や、発症した学生への心理的・医療的支援の重要性が注目されるようになってきた。一方で、国内の大学生に対する摂食障害の実態調査は極めて限られており、予防的介入や適切な支援についての調査研究は皆無といってよい。本研究では、まず、定期健康診断データを用いて大学生における摂食障害の実態を体重（BMI）を基軸に調査し、その分析結果から予防策や支援を目的とした次段階の調査研究について提言を行うことを目的とする。＜研究手法＞金沢大学と福井大学における2019年度大学生定期健康診断データを利用し、まず、体重（BMI）に基づき3つのグループ1）低体重（BMI17.5未満）2）標準体重（BMI17.5以上25未満）3）高体重（BMI25以上）に分け、男女差や所属別における傾向を把握する。次に金沢大学の健診項目の中で摂食障害の寄与因子とされるダイエット経験、メンタルヘルス、女子における月経関連要因を取り上げ、BMIとの関連を調査分析する。低体重は神経性やせ症と強い相関関係が文献において証明されていることから、探索的に低体重群をさらに細分化してメンタルヘルスとの関係を見る。

＜結果と考察＞1. BMIによるグループ分け：a 金沢大学健診参加学生 8260人（男子5020人、女子3240人）b 福井大学健診参加学生（文京キャンパス）3169人（男子2342人、女子827人）に対し、①低体重群 a.480人（5.8%）、そのうち男子学生232人（4.6%）、女子学生248人（7.7%）、b.177人（5.6%）そのうち男子116人（5.0%）、女子61人（7.4%）②標準群は a.7038人（85.2%）うち男子4228人（84.2%）女子2810人（86.7%）、b.2615人（82.5%）で、男子1903人（81.3%）、女子712人（86.1%）③高体重群は a.742人（9.0%）で、男子560人（11.2%）女子182人（5.6%）、b.377人（11.9%）で、男子323人（13.8%）女子54人（6.5%）となっている。

2. 大学生におけるダイエット経験：ダイエット経験について過去、現在を含めて「あり」と答えた金沢大学学生は男子全体で298人でそのうち低体重群は2名（0.7%）であり、標準群に185人（62.1%）、高体重群に111人（37.2%）という内訳になった。一方で、女子全体は220名で低体重群9人（4.1%）標準体重群178人（80.9%）高体重33人（15.0%）となり、女子のダイエット経験に関しては標準体重群が一番高いことがわかる。3. 女子学生の月経の様相：金沢大学女子学生において月経に関してトラブルを抱えている・悩んでいると答えた群は低体重61人（10.7%）、標準481人（84.7%）、高体重26人（4.6%）と標準体重が突出して多く、また、月経が3か月以上来ていない（過去現在含め）女子は標準群が44人（1.6%）であるのに対し、低体重群（9人）と高体重群（7人）はそれぞれ全体の4%となっており、比較的高いことが窺われる。4. 体重別にみたメンタルヘルスの違い：メンタルヘルスを①大学生生活の悩み（9項目）②K6（6項目からなる鬱と不安症の

【別紙】

スクリーニング)の2つの尺度を用いて検討した結果、金沢大学学生における低体重群と標準体重群、また標準群と高体重群との間に有意な差が見られた。K6にも同様な傾向が確認され、平均値において低体重群が最も高く(4.11/24点)続いて高体重群(3.76)標準群(3.35)となり、低体重、高体重群と標準群の間にはそれぞれ有意な差が見られた。また低体重群をさらに細分化してK6との相関を見た場合、最も低いBMI(13-14)はわずか2人であるが両者とも13点以上(重度の社会機能障害)を示しており、速やかな医療支援や介入が必要な対象とみられる。また何らかの心理的ストレス反応をしめす目安となる5点以上はBMI14以上17.5未満の低体重群において168人で全体の6.7%を占めていた。現在金沢大学では、高体重群の学生については健康指導等を健診後のフォローアップに加えているが、摂食障害を含む体重(BMI)と学生生活やメンタルヘルスの相関性については考慮されていない。これまでの分析結果から低体重のみならず高体重の学生群が何らかの心理社会的負荷を抱えている可能性が窺われるが、摂食障害(神経性やせ症及び神経性過食症)の病態に当てはまる群を特定するためにはもう一段階の焦点化されたスクリーニング及びアセスメントが必要であり、健診後の呼び出しなどを工夫する必要があると言えよう。